

2019.9  
(公社)富山県薬剤師会  
広報誌

# とみ やく 富 薬

9号

第41巻  
No.362



ヨシ *Phragmites australis* Trin. (イネ科 *Graminae*)

**生薬** ロコン（蘆根） 秋から冬にかけて、地下茎を掘り取り、水洗後節々の根を取り除き、陽乾する。

**成分** coixol、asparagine、vitaminB<sub>1</sub>、B<sub>2</sub>、C等。

**効能** 解熱、利尿、止渴薬として小便不利、便秘、消渴、肺炎、嘔吐、食中毒に用いる。

生薬 ロコン（蘆根）

元富山県薬事研究所  
薬用植物指導センター

村上守一氏 写真撮影

## 〇〇表紙について〇〇



世界の亜寒帯から亜熱帯の水湿地で大群落をつくる草丈1-3mにもなる大型の多年草で、国内の北海道から沖縄までほぼ全国に自生します。根茎は地下を長く横走り、茎は直立し円柱形で節があり、節ごとに狭い披針形で先が尖って垂れる葉をつけます。夏から秋にかけて茎の先に大型の円錐花序を抽出し、10-17mm、2-4個の小花からなる小穂を多数密生、最下部の小花は雄性で10-15mmと小さめです。国内にはよく似た同属植物が他に二種あり、一種はセイコノヨシ（別名セイタカヨシ *P.karka*）といい、関東以西の暖帯から熱帯に群生し、高さ2-4mと大型で、葉は斜上し上端は下垂しません。また、翌年の晩冬まで地上部が枯れることがないところから、ヨシとは区別がつきます。また小穂は5-8

mmと小さい。もう一種のツルヨシ (*P.japonica*) は本州以南の川の中流域以上の砂地などに自生し、高さ1.5-2mと他の二種より低く、地上を這いまわる匍匐茎を持ち、節から根を出し繁茂します。小穂は8-12mmと小さく褐色を帯びます。以上3種は生育地の状態に合った形態に変化したものと考えられます。現在ヨシ原は減少の一途をたどっていますが、自然界では重要な役割を担っていることが分かってきています。ヨシ原は水の流れを弱め、汚れを沈め、土中に微生物などを増やして汚れを分解し、窒素やリンなどの富栄養物質を吸収するなど、水をきれいにします。また、魚や鳥の棲家を提供し、古くからの日本の景観を守る役目も果たしています。加えて薬用以外にも葦簀や葦葺き屋根、夏障子、葦の衝立など家屋や家具の材料として使われています。最近では葦の紙や葦を使った腐葉土などにも利用されています。

亜寒帯から亜熱帯地域のモンスーン気候で、雨量が多い日本では古くから我が国を代表する植物として扱われています。『古事記』(712)の創世編に「まだまだ国土は若く、固まらず、水に浮いている油のようで、クラゲのように漂っている状態でした。すると葦の芽が成長するように生まれたのが、宇摩志阿斯訶備比古遲神（うましあしかびひこじのかみ）と天之常立神（あめのとこたちのかみ）です」と神の誕生が植物であるヨシの芽に例えられ、また国譲編には天照大御神（あまてらすおおみかみ）が「豊葦原之千秋長五百秋之水穂国（とよあしはらのちあきながいほあきのみずほのくに）は、わたしの子供である正勝吾勝勝速日天忍穂耳命（まさかつあかつかははやひあめのおしほみのみこと）が統治すべきだ」と言ったことが記されています。ここでいう「豊葦原之水穂国」とは、葦原の水田に稲穂のなる国の意で、水が豊かで稲作に適した日本の国土を表すものと思われます。『日本書紀』(720)にもほぼ同様のことが記されています。『出雲風土記』(733)には鳥根郡の海岸の美佐鳥や秋鹿郡の山野の都勢野に葦の名が見られます。

『万葉集』(7C-8C)にも身近な植物として51首が詠まれています。中でも水鳥などと共に詠ったものが多く、一首上げますと

葦辺行く鴨のは羽がひに霜ふりて寒きゆふべは倭し念ほゆ（志貴皇子）

他に『枕草子』(1001)の70段「草の花は」に「葦の花は、更にみどころなけれど、御幣などいはれたる、心ばへあらんと思ふにただならず」とヨシの花について、『源氏物語』の須磨には「茅屋ども、葦ふける廊めく屋など、をかしうしつらひなしたり」と資材としてのヨシを書いています。

同時期の本草書『本草和名』(918)には「蘆根、花名蓬蘆（蘇敬注出）、一名葦一名葦（兼名苑出）、和名阿之乃祢」とあり、『和名抄』(931-37)にも「蘆葦、兼名苑に云う、葦一名葦、和名阿之」と、『医心方』(982-84)にも「和名阿之乃祢」とあります。（村上守一 記）